

平成30年度 第1回芦屋市市民参画協働推進会議 会議録

日 時	平成31年2月6日(水) 午後6時～8時
場 所	東館3階中会議室
参 加 者	会 長 渡辺 直子 委 員 榊原 貴倫 加藤 裕介 山岸 吉広 松井 順子 欠 席 平野 隆之 廣瀬 雅宣
事 務 局	事務局 川原 智夏 企画部部长 浅野 令子 市民参画課課長 御宿 弘士 市民参画課係長 三浦 真衣 市民参画課課員 飯星 雄麻 市民参画課課員
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開
傍 聴 者	0 人

1. 会議次第

- 1) 開会
- 2) 議題
 - (1) 市民参画協働に関するアンケートについて
 - (2) これからの市民参画協働について
- 3) 閉会

2. 配布資料

- 資料1
- 資料2

3. 審議経過

- 1) 開会
 - ・会議の公開, 傍聴についての確認
- 2) 議題
 - (1) 市民参画協働に関するアンケートについて
 - (2) これからの市民参画・協働について

(事務局：浅野)

ただ今から、平成30年度第1回芦屋市市民参画協働推進会議を開催いたします。市民参画課の浅野でございます。よろしくお願いいたします。昨年度から事務局のメンバーが人事異動により変わっておりますので、改めて紹介させていただきます。

(川原企画部長)

企画部長の川原でございます。

(事務局：浅野)

市民参画課長の浅野でございます。

(事務局：御宿)

係長の御宿でございます。

(事務局：三浦)

課員の三浦でございます。

(事務局：飯星)

同じく課員の飯星でございます。

(事務局：浅野)

なお、委員の皆さまの中でも変更がありまして、自治会連合会より選出いただいております田中委員が、自治会連合会の改選により役を退かれましたので、代わりに新役員となりました廣瀬委員が参加することとなります。本日は、あいにくご都合によりご欠席となっておりますので、次回に改めてご紹介させていただきます。

芦屋市市民参画協働推進会議規則第3条で、「委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。」とされていますが、本日は、7名中5名がご出席ですので、この会議は成立しております。

また、芦屋市情報公開条例第19条により、会議は原則公開ですので、傍聴人がいらっしゃいましたら、入室していただきますが、本日傍聴はございません。

会議録作成のため、会議内容は録音いたします。会議録は発言者のお名前を含め、後日公開いたしますのでご理解ください。

進行につきましては会長にお願いします。

(渡辺会長)

それでは、皆さま、年度末のお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。前回は、1年前の11月21日に開催され、1年以上の月日がたってしまいました。前回お話しした内容も忘れてしまったところもあると思いますが、新たな気持ちでどうぞよろしく願いいたします。

さっそくですが、議題1に移らせていただきたいと思います。議題1といますのは、「市民参画協働に関するアンケートについて」の話し合いをしたいと思います。その事前の情報として、事務局より説明をしていただきたいと思います。

(事務局：御宿)

◆事務局より資料確認。

◆事務局より「資料1：市民参画協働に関するアンケートについて」に基づき説明。

(渡辺会長)

それでは一度、5分程度の時間をかけてアンケートに目を通していただき、何かお気づきの点などあればご発言ください。

(榊原委員)

質問といえますか、可能かどうか教えてください。アンケートとして僕は非常に面白い項目があつていいなと思います。これは2,000部配布ですか。

(事務局：御宿)

はい、2,000部です

(榊原委員)

2,000部でもいいと思いますが、回答の生データの公開を今回できないですか。結局この手のアンケートは見る人によって取り出したい情報が変わるんです。例えば、僕らとかまちづくり協議会や自治会をやっている人からすると、自分と近い自治組織とかの周辺で、どういうニーズや課題があるんだろうという疑問に対し、地域別や家庭別でデータを取り出して比較対象になるような、同じような悩みがあるところにちょっと遊びに行こうかということにフックできるアンケートデータだと思うんですよね。こちらの冊子も読みごたえがありますが、製作者自身の見たい分析結果だけに集計して結果だけを紙で出されてしまうと、また紙とペンを持ってきてやらないといけない。もし可能であれば集計後のデータを、例えば簡単にエクセルなどで公開していただくと、すごく興味深い結果を各自治組織が見られると思います。逆に言うと、そのデータってどんなふうに分けられたかを、もう一度集計し直すと非常に興味深い結果が出るのではないかと思います。いろいろなステークホルダーがいらっしゃると思うので、難しいかもしれませんが。

(事務局：御宿)

オープンデータ化に関しては、市としても積極的に進めているところもありますので、可能な限りやっていきたいと思っています。

(渡辺会長)

私は根本的な質問があります。昔は地域型のコミュニティが中心でしたが、今はもう地域型コミュニティが機能していないということがはっきりしている中で、もう一度「なぜ地域と関わらないのですか」ということを聞いていくことに意味があるのかと思います。今、地域型を卒業していて、「何々町に住んでいるから、何々町の事を考えましょう」という人は、ほとんどないのが実情の中で「どうしてあなたは何々町の事を考えないのですか、関わっていないのですか」と聞くことの意味がどの程度あるのかということと、その次はどうなっているかと言うと、テーマ型に移っている中においては、ではどういうテーマでコミュニティを作りたいのかということ

あぶりだすためのアンケートとしては希薄なのではと思います。というのも、このアンケートは、大枠な聞き方をしているのでキーワードがあまり出てきていないことが気になります。「どんなテーマでやりたいの」ということなのですが、選択肢で選ばせるのもいいけど、もう少し書いてもらおうとか、生の声や、ちゃんとキーワードで出てくるような形にできないかなっていうのが1つ。もう1つは、テーマ型コミュニティでさえも、市民はもう卒業してきているのではないかなという気がこの頃していて、テーマが一緒というのと加えて、どんな人と活動したいのっていうことがすごく大事になってきていて、例えばテーマは違うけどやる気のレベルが一緒の人とか、もっとヒューマンな所での、求めているジャンルがあるのではと思います。

ワークショップでもみんなやりたいことはバラバラです。アロマをやりたい人やヨガをやりたい人、やる内容も違いますが、「なんかこの人達と一緒にいたい」という強いエネルギーがある。それはなぜかと思っていると、その人たちのテンションが一緒で、お互いにテンションやエネルギーを貰いあったりして、コラボレーションする時にこういう人達とやりたいと発想が広がったり、そういうヒューマンパワーのコミュニティを作りたいというところに、もはや移ってきているのではというような気がします。実情がそうなのに、アンケートはあんまりそれについて行っていないような感じがします。

もう1つは「なぜ地域に貢献しないんですか」という切り口になっていることが気になります。その答えはたいがい「忙しいから、暇になったらできる」ということに落ち着いてしまって発展性がない。そうではなく、実は地域が自分たちに貢献してくれたら関わると思うので、そういうふうに視点を変えた方がいいと思います。地域とか行政とかに対して自分たちが何かをしなくてはいけないというスタンスよりも、地域があなた達と関わることによって、あなた達のメリットを上げたいんですよということが前提にないと、それならこういう風にきてくれたら、こういう風に返して関わりたいという、意見や意欲が出てくると思います。そういう意味で、地域の関わりに関して方向性が逆になってきていると思う。それは時代性もあってという気がします。

(事務局：御宿)

まさにその通りだと思います。我々は自治会の担当もしていますので、自治会の人たちの中でも、勧誘する時に「なぜ自治会に入らないといけないのですか」と言われて困ると聞きます。入った時のメリットに関しては「いざとなったら助け合いができる」ということは言えるけど、それ以上に日常でつながりがあることに対して何のメリットがあるかを言えることがあるかと、自治会に関わっている方たちも思っている。しかし、いざという時や、例えばちょっとしたお困りごととか、別に行政に頼むことではない事とか、現実的にそこに住んでいる人が困っていることでご近所さん同士でないと解決できない事がある時に、隣の人を知らないとそこに対してどうしたらいいのか困る部分もあります。そのようなことが自治会などに入っていれば、横のつながりで何とかできるというのがメリットなんです。

しかしそういった問題が常日頃あるわけでもないのに新しく入ってきた人に「どうですか、入らないですか」と勧誘しに行っても、ご納得いただけないところがありジレンマを感じているようです。行政としても、そこをどう導いたらいいのかの答えはありません。今、まさに過渡期なんだろうと思っています。

テーマ型も卒業かもとおっしゃっておられましたが、時代がどんどん進んで、みんなの感性や価値観が変化している中で、自分の住んでいる地域の事とか、社会貢献そのものに対する考え方も変わっていったらと思います。行政はそこまでその変化に対応しきれていないので、変化の兆しを少しずつでも計画の中に落とし込みながら進めるしかないのではと、個人的には思っています。

なぜ地域のコミュニティをといるところですが、結果的にはいろいろな活動があつて、もちろん地域にこだわらなくて、趣味とか、価値観の合うところで集まるという、それはそれで進んで行くんだらうなと思います。

一方で、人口減少というのが加速しています。芦屋にお住まいの方は分かるかと思いますが、一部地域では高齢者の方が主になりつつある中で、いろいろなツールが便利になって、人の手を使わずともできてしまうことがもっと増えてくる可能性もありますが、現段階で分かっていることは、やはりお互いの助け合いが必要となってくるのがまだまだあるし、そこへみんなが少しでも目を向けて頂かないといけない。極端な例ですが、芦屋での事例の1つとしては、お隣に一声かけたら済む話を行政になんとかしろと言ってくる場合があります。それを全部対応していると、行政側は組織のマンパワー的な面で限界をむかえることになるのですが、今後はそういうことが増えるのではないかと危惧しています。かつ、財源面でも市の施策が多様化しているので、あらゆるところで財源を投下しなければならない。そうすると市民税や固定資産税など市の財源になるものは、市民の所得状況や不動産価値に左右されて税金の多寡が決まりますから、あまり劇的に増えるということはないです。住んでいる人が激変するわけではないので。

限られた財源の中で、いろんなことに手を出さないといけないことになると、行政の守備範囲を、今まで個々の施策に深掘りで手厚くできたものが、広く浅くになる。そうすると市民にはご自分でしてもらうことが増えるので、その社会を見据えた時に、少しでも自分の住んでいるところに関心を向けてもらいたい。必ずしもそれが自治会に参加ということではないですが、何らかのかたちで気づいて欲しいという思いが行政にはあるので、敢えてこういう質問をしているということです。

(榊原委員)

自治の仕事は地域によって違うと思います。田舎だったら地域の草引きをみんなでしないと、どんどん生えてくるし、行政だって黙っていても手入れが追いつかないから、みんなでやらないといけないため、その中でつながりがわかりやすく明確になってくるかと思います。しかし、芦屋はどこに行っても綺麗だし、公園も羨ましいくらいすごい。そうなってくると無関心なままでもきちんと利用するので、文化度が高い住民の方が多いと体感しています。そうすると、「一般的な自治ってこうですね」というカテゴリーを渡しても、ただ面倒くさいだけになるのではないのでしょうか。芦屋ならではの、高齢化しても、人に頼らない一定層に出てくるような孤独死の問題とかでは、全然ちがう視点での見守りの理由やきっかけをどこかに欲しているという話だと思います。

それでいくと、例えば、聞き取りの項目に独居とか複数世帯とかがあるだけでも関わりがどうか見えてくるのではないのでしょうか。アンケートとしては福祉に寄り過ぎかもしれませんが、ポ

トルネックになるような課題が明確ならば、それに寄せたアンケートをしてもいいのではと思う。ただ、この定点観測での情報も必要なのですが逆に、自治側ではそれらの支えあい全部がやるべきことではと思われると、自治会はよりしんどくなるし、まだ入っていない人からすると「こんなにあるの」って、ハードルとしてはすごく高くなると思います。このように、あまりにもカテゴリーを増やしてしまうと、IT でこういうのを分析する時にはどれくらいの仕事量が類推値で出ることかということ进行分析するので、これだけ選択肢があるととんでもない仕事量が出てきて、結局一つの仕事の分析としては使いにくいものになってしまう。逆に言うとそれだけの仕事を取り出せるので、「この地域や仕事にはこれがこれだけ足りてないよね」という分析ができるのですが、それだけ多様な政策ができますかということにもなります。これだけの分類に対して、例えば街の中で自治のアクションを重ねてみて、そのケースとアクションの因果関係を結べますねとか、分析としてどこまで落としこめるのかということにつながってくるのかと思います。もっと定量的な所で答えを照らし合わせるかというのが一番大事かと思います。

(事務局：御宿)

まだ明確に次にこれをやるということが決まっているわけではないですが、担当課としては、今回の調査は健康診断で言えばとりあえず網羅的にやる健康診断で、その中で振れ幅があるところに関しては、より深く調査するために可能であればグループインタビューを次年度やることによつて、考えたいと思っているところです。

あとはどうしても行政的な考え方になるのですが、例えばアンケートの3ページ目に「あなたのお住まいの地域で気になること」と書いていますが、その選択肢の1番から11番目くらいまで行政の施策です。例えば後段を主に見ていただけたら分かるかと思いますが、「交通安全」「環境衛生」「景観」「災害」「防犯」「高齢者」「障がい」「子育て」「文化芸術」「国際協力」など。どの程度活動に従事しているのか、あるいは関わっている人がいるかという行政の施策的観点からあえてこの分類にしているところです。唯一、12番の「地域のにぎわいや活気に関する事」というのがどれにも属さないというジャンルです。

困りごとはないけど、「この地域はこのままでいいのかな」という寂しさや地域のにぎわい作りは必要性を感じておられる方の選択肢として入れた項目です。

芦屋も高齢化していますので、特に明確に課題を感じていないけど、地域に対する何らかの寂しさのようなものがあれば、この12番を選択していただけるのではないかと考えています。

今の二十代、三十代、四十代も単に仕事をしているだけではなく、少しでも地域や行政に関わってみようと思う方がいた時に、どの分野であれば関わってみようと思ってくれるのか、ここで示す選択肢だけではないと思うのですが、我々的にはマーケティングをしているつもりです。アンケートとしての聞き方が悪いかもしれないですが、どこに突破口があるのかと思っています。

世代別にどこに関心があるのかということ、後段にあるテーマ型との掛け合わせの中で、仮に環境衛生に興味がありアウトドアが趣味ならば、アウトドアの観点を入れたどのような関わり方があるのか。例えばゴミ拾いがあるかもしれないし、何かしらのイベントの引っかけ方があるかもしれない。そこを導き出せたらと思っています。

(榊原委員)

この「新しい暮らしや文化の創造発信」というのがありますが、アンケートをとって芦屋ベースの新しい暮らしを創って発信するということにつなげていかないと、結局高齢化でネガティブな対応に追われている感じがして、あまりワクワクしないです。市民として新しい人が参加する理由が特になくて、暮らしていくとか子育てをしていくとか、これからの生産世代にとってここでの暮らしが新しいとか、そういうところにキャッチアップした内容で発信した方がいいのではと思います。

(事務局：御宿)

要は、深刻に考えず課題を1つのチャンス、課題から何かプラスなものを1つ生み出すということを行政としてはやっていきたいと思っています。しかし、今のところ行政としては、皆さんとの関わりや接点あまり見えていないところがあり、何らかのかたちで行政やまちづくりに興味がある市民の方を引っ掛けたい、このアンケートを通じて導き出したいと思っています。それがこのアンケートで聞き取れきれているのかというのを、委員の皆さんにお聞きしたいと思っています。

(加藤委員)

意見の前に確認させていただきたいことがあります。

前回アンケートがまとめられている青い冊子の1ページ目にある、2,000人を無作為抽出して、実際に回収できているのが970件。母数がどんなものかが分からなくて、これでいいのかどうか。客観的に見ると970という数字は50%を切っていて少ないので、そもそもアンケートに答えていただく方を増やさなければいけないというのを感じました。市役所としてはこの回収率はいかがでしょう。

(事務局：御宿)

2,000人については、単純に年齢構成や性別を考えずに2,000人を抽出しているわけではないです。市民の縮図の母集団となるように、世代別の割合や男性女性の割合を基本は一致させて、抽出をしたものが母集団の状況です。回答率だけでいうと、そもそも母集団が2,000人でいいのかなどは、人によって考え方が違うと思いますが、統計学的には95,000人の人口に対して2,000人くらいの調査をしていけば問題ないという認識です。そして回答率については、実は50%前後というのは行政としては高い方です。一般的には30%という中で設定するので、信頼できるデータであることは間違いないというこちらの理解です。

(加藤委員)

一市民として考えた時に、個人的に、同年代の中でも地域に興味がある方だとは思いますが。それを割り引いて考えたとしても、これだけのボリュームのアンケートがきたら、そんなに課題意識がないので答えない。この48.5%の回答者は問題意識がある方々なのかなと思います。

行政として考えると、課題意識を持っていない人に参画意識を持ってもらえるきっかけづくり

をしたいが、そういう人たちの声が拾えていない可能性がある。回収率が高かったとしてもそれが課題なのかなと思います。

アンケートの内容は、正直これでいいかはわかりません。専門の方の判断によるのかなと思います。どちらかというと、本来聞きたい方たちにどう答えてもらうか、そういうきっかけを作れるのかという方が重要で、聞きたい人の声が聞けていないことが一番問題だと思います。そのへん感覚としてはいかがでしょう。

(事務局：御宿)

まさにおっしゃるとおりです。例えば「高齢者の引きこもりを無くしましょう」ということに対して、何らかのアプローチをしてそういう仕掛けの場があったとしても、そこに出てくる人はある意味、課題の程度が深刻でない人が表に出てきます。本当はそれにすら来ない人をどう拾うのか、というところが一番の問題のほうです。しかし、そこに対するアプローチをどうしたらいいのか、我々もそこに対する課題認識はありますが、正直どうやっていくべきなのかなというのを悩んでいるところではあります。

例えば民間企業ではどうするのかという素人発想な疑問ですが、とある商品売りたい時に行うマーケティングで、今までの対象者じゃない層にアプローチをかけたい時にどういう調査をするんだろうなと思っています。本当は的確なポイントで調査をして、それを導き出せたらいいでしょうけど、現段階で行政の中でそこまでやっていく手法は導き出せていないと思います。個別のグループインタビューの母集団を工夫することで、ちょっとでも興味関心が薄い層が地域や、あるいはまちづくりに興味を持ってもらうのを、話を聞く中で導き出すしか方法はないのかなと思っています。

(加藤委員)

個人的にも、芦屋のいろいろな場に参加させていただくことが最近多かったのですが、結構同じような方の集まりという印象は受けました。恐らくそういう意識を持たれた方ばかりが集まって、そういう方の声しか拾えないのかなと。そうではない場を作ったとしても集まらないので、どうアプローチするのかということですね。

(事務局：御宿)

それはこちらでも問題意識を持っているところです。どういうやり方がいいのか、すぐにお答えはできないですが、何らかのかたちでそういった層にはアプローチしていきたいと思っています。

(榎原委員)

ちょっと実現性が薄いかもしれないですが、これは紙でやっているんですよ。たぶんワンタイプで、例えば集計用に人もいるということで。予算サイクルとかもあるので、ある意味これが限界でこの中からアイデアを出していると思います。

例えばLineでもチャットでもfacebookでもいいですが、固定的にアンケートでき

る仕組みは継続的に設置しておいて、市民と接点がある、例えば市役所の待合いや総合窓口で待ってもらっている時に、声掛けをしてタッチパネルなどで回答してもらい続けるのはどうでしょう。ある一定期間のうちに集め続けて、その結果はリアルタイムで見えるので、今、何件くらいのアンケートを回答しているというのにつなげられたりします。この地域はあまり回答率よくないよねとか、そうなる自治会の人たちに協力いただくとか。結局こういう回答って人と人のつながりで、この人に言われたら回答しようかなとか思うような気がしてきます。そういう新しいアンケートのやり方って、結局、人とのコミュニケーションが生まれるので、ただそれに対してのモチベーションって何だろうっていう、ちょっとそこが今わからない。何かしらの数値をもとに政策が実行されると、それを待っている人にとったらそれがわかりやすいKPIなので、みんなアンケート答えようよみたいな。「選挙に行こうよ」に近い雰囲気だと思います。地域で課題だと思っていたが、今までそれが届かなかったのが、しかし自分たちの声の数がしっかりと見えるアンケート結果になり、それに対して政策が行われたら、エビデンスドリブンなんですけど、そういうのは可視化されていると面白いかなと思います。

（加藤委員）

アンケートに限らずですが、民間の活動でも今まで見えなかったものを、数字や何かが見えるグラフとか、リアルタイム動くようにするだけで関わり度が増したとか、社内の組織改革みたいなものにも事例としてはあります。アンケートの進捗だったり、アンケートでかたちになったものが、どれだけ施策として進んだとか。市のホームページだけでは見に来ないと思います。何かしらの良く使うツールで見れるようにすると、わりと参加意識というかアンケートを含めた関わりとしては増えるのではないかと。

（榊原委員）

自治とかレクとか集まりとかやることに飢えている所は多いと思います。時間があればこれを挟もうかみたいな。もしかしたらあるのかもしれないけど。そういうニーズを初動としてとれてたら面白いなと思います。

（事務局：御宿）

実は2年くらい前、芦屋の総合戦略を作る時にやったこととして、「どういう理由で芦屋から出ていくんですか」「どういう理由で芦屋に入ってきたんですか」みたいなことを、プロジェクトチーム的に参加できるメンバーが、市民課の窓口周辺に立って「待っている間に聞かしてくださいね」とやりまして、わりとちゃんと答えていただきました。それをタッチパネルでやるのは有効だと思います。その時は結構答えてくれているという実感をこちらも持っていますし、先ほどおっしゃっていただいたような、特に気になることをその中から拾っていくということは、有効なのかなという気がしました。やり方がどうできるかがまだ分からないですが、工夫の余地はあると思います。

（加藤委員）

仕事柄WEBマーケティングをしているので、アンケートではなくWEB限定の話になりますが、何か資料請求をする時、フォームに名前や住所を入力して資料請求をしますよね。フォームって最近変わってきていて、昔は一覧があって、それだと初見で「こんなに入力しないといけないの」と途中で面倒くさくて離脱してしまうんですね。最近は、特にスマートフォンが多いので、1ページで見れて次のステップへゲーム感覚で進めると1画面で見れて、ストレスがない。そうすると10ページあっても進んでいける。そういうフォーム形式にしたら、効率が上がるというのはよく聞きます。

項目がたくさん書いているよりは、フォームをLineみたいなかたちにして、相手から質問がきて答えるような、チャットのような会話形式のフォームだと答えやすくなる。Lineがそもそも認知度があるので障壁が下がる。ただ高齢の方と若い人で反応は違うかもしれないですが、なじみのあるフォーマットで答えてもらうと反応はいいのかなと思います。

(事務局：御宿)

自治会の方とか顕著だなと思うのは、仮に高齢の方でも女性はLineとかやっている傾向が高いです。逆に高齢の男性はいまだにガラケーとか、そもそもネットを見ていないという人が多い印象はあります。

(榊原委員)

うちのまちづくり協議会では90%くらい、80歳の男性も入っています。家族用だけです。

(事務局：御宿)

そうですね、一度入ってしまえばそこに違和感なく入れるのでしょけれど。まだまだ芦屋の場合は見る限り、そもそも機械に対して苦手意識を感じる方たちがいる。それでもこれから割合は増えていくのではと思いますので、Lineを駆使したアンケートとか、声の拾い方に対しては非常に有効なのかなと思いました。

(渡辺会長)

松井委員はいかがでしょうか。

(松井委員)

最初の質問に戻ってしまうかもしれませんが、聞き逃していることがないように、もう一度確認の意味を含めてお聞きします。

最初の説明で、前回のアンケートの結果では、年齢が高いと地域への関心が比較的高い。それから価値観がどのように違うのかということで、このような新たな質問項目を設けているという話だったと思います。

では2つの質問ですが、こういうことを話しすることによって、その結果から何か地域に応じた、あるいは市内全体でテーマ的な事を何か施策の中に盛り込んでいきたいと思って、こういう事を聞いているのかというのが1点目。2点目、私はアンケートは経年的に見ていかないと施策・

政策の評価ができないと思います。前回アンケートを踏襲するのはとても大事だと思いますが、前回の調査の結果として出てきたデータの中からどんなことが芦屋市内で取り組まれて、具体的な成果が出ているのか。具体的な例で簡単に成果が出るものではないのですが、良かったなというお声が出ているのであれば、事例的に教えて頂けたらと思います。

(事務局：御宿)

まず1点目ですが、1年前の市民参画協働推進会議の皆さんからの意見の中で、今まで市民参画課という課はどちらかというと自治会と関わりのある課でありましたが、庁内の各部署に市民参画や協働とかを推進するよう言ってきた課です。程度問題はあると思いますが、それなりに各課でも地域の声を聞こうとか皆さんと一緒に協働できる分野はないだろうかということが浸透してきたという中で、次のステップとして市民参画課として何をやるのかとなった時に、ブレイン的で実働しない課というよりは、もっと自らが動いて新しいスタイルというか、新しい参画や協働のスタイルをつくる実働部隊になっていくべきではというお声をいただきました。こちらはその視点は、その通りだと思っています。今回、次の計画の中で、我々がもっと前に進めて行けるように動き出したいと。その取っ掛かりを知りたいということもあって、今回の調査内容にしているというのが1点目です。

2点目。これは私個人の整理として、どちらかというと前回のアンケートは、現状を理解するというところに特化したアンケートだと理解しています。ですので、青い冊子の中で後段の所に、前回のアンケート調査項目の中にあります、「市民参画の達成状況はどうか」「皆さんの意識はどうか」と聞いている項目があります。このことからその時における市民参画とか協働の施策が、どの程度浸透しているのかを把握する調査だと理解しています。今回はそこからもう一歩前に動き出すための取っ掛かりはどこにあるのかということに主眼を置いて、調査項目を設計しなおしているということです。ただ、一方で先生がおっしゃるような定点観測をしないと、経年の変化の中から今の住んでいる世代の、例えば5年前の40代の半分以上は今回50代になっているということで同じ人がずっと住み続けるけど、世代交代があるので時代の流れとともに、その時に思っていたことが今とは違うということも当然あると思います。経年の変化の中からまちづくりに興味がある人がどの程度増えているのか、もしくは減っているのかを含めて、聞いていきたいということで、定点観測の項目も多く設けているということです。

(山岸委員)

私は福祉の視点に偏ってしまうので申し訳ないですが、アンケートを見る限りでは、福祉でも共通するキーワードが確認できると思います。つながり作りと新たな項目のテーマ型コミュニティの連携については、会長もおっしゃられたテーマ型も通り過ぎたのではないかという中で、芦屋の地域特性なのか分かりませんが、地域に愛着を持っている方は非常に多いです。これは世代関係なく、若い人はここに住みたい来てという方もいますし、ただそこに住みたいだけであってその地域をどうしたいかにつながっているかどうかが、アンケートから見えてくることによって、施策に反映できるのではと思います。

アンケートの中で気になったところは、つながり作りの部分と、後段の逆にどんな活動に興味

がありますかというところの、人との関わりは鬱陶しいけど自分個人としての活動としてはこうしたいと、相反するところなので、アンケートした結果で、どういう風にそこを解釈するかというところがあります。地域の方から聞くのは、若い世代の方の意見をもっと聞かなくてはいけないのでは、高齢者の方はもう引退なんだとおっしゃられる方もいます。この先、我々どんなに頑張ってもいなくなるわけだから、この街を若い人たちが住んでいて良かったとか住み続けたいと思えるような街にするにはどうしたらいいのか、若い人たちの意見がここにどう反映されるのか、少し突っ込んで聞けるような設問があればいいのかなと思います。

(事務局：御宿)

ありがとうございます。その視点は我々も持っていて、昨年、渡辺会長にワークショップを運営してもらった中で、モトマチ大学を運営している方を紹介していただきました。その方のコンセプトは、「学びというテーマを興味軸にいろいろな交流が生まれませんか」ということに重きを置いて活動している方です。話を聞く中で、矛盾しているけど本質をついているのではないかと感じたことの中の1つに、「他人のコミュニティって鬱陶しくないですか」とおっしゃられたんです。要するに強固なコミュニティが出来上がると、逆に他から入りにくくなると。行政はコミュニティならオールオッケーという感覚を持っていますが、新しいコミュニティや今の衰退しつつあるコミュニティをなんとかしようと思ったら、実は強固なコミュニティのハードルをいかに下げるかということが、逆にそのコミュニティの活性化になる可能性があるのではないかという気づきを与えて頂きまして、そういう答えが出るのではないかというのがこのアンケートの中の仮説の1つとしてしているところです。そうなった時に、既存のコミュニティと新しくそこに関わろうとすると、どこに接点を持つかということを我々が考えなければならない。今考えているのはテーマ型というのが、1つの接点になるのかなと思っています。そういうアンケート設計にしています。

(渡辺会長)

では、アンケートに関しては一通りご意見が出たということでもよろしいでしょうか。

(事務局：御宿)

アンケートに限らず、日々の市民の意見をどのように拾うか、いろいろなまちづくりを一緒にやっていける方をどのように探すのかを含めて、いいアイデアがあればと思っています。どこまでスピード感を持って対応できるかは、今後の我々の活動次第ですが、そういう活動も視野に入れながら対応していきたいと思っています。

(渡辺会長)

では議題2に移りたいと思います。議題2、これからの市民参画協働についての説明を事務局からお願いします。

(事務局：御宿)

ここは議題としてあげているものの、明確に何かをご説明するというのではなくて、本当にフリーのディスカッションをさせていただけたらと思っているところです。

ここで出た意見がどうなるのかと言え、まさに次期の計画を作るに当たり施策立案とか、あるいは具体的な実行計画としてやっていくことに、出来るだけ落とし込んでいきたいと思っています。皆さんがいろんなアイデアをおっしゃっていただいて、我々行政としてどれだけ取り入れられるかということにかかってくると思っています。これからのまちづくりということ、単に行政だけが進めるのではなく、いろいろな人との関わりの中で進めようということを始めなければならない時に、どのような行政としての仕掛けができるかとか、どのような場を設けるかとか、皆さんが知っていること、体験したこと、形式はなんでもいいので、ご意見をいただけたらと思っています。

(渡辺会長)

では、さっきよりはざっくりばらんに話し合えたらと思います。その皮切りに、私自身が最近、とてもいい勉強をさせていただけたので、簡単に報告して、そこから話を広げたいと思います。

去年の9月末から12月末まで、市民参画課からの要望で「芦屋まちデザインラボ」というワークショップを三か月間6回にわけて開催しました。約25人の参加者が集まりまして、夜7時から9時までリードあしやというところで二週間に1回くらいのペースで開きました。あまり脱落者もなく私自身もすごく楽しくて、ファシリテーターをさせていただきましたが、とても勉強になりました。皆さまの手元にあります5回分のニュースレターがその様子です。キックオフイベントで市長にも来てもらって対談をした分と、2回目からは普通の授業になり、最終回には皆さんのしたいことをまとめて発表してもらったということをしてもらいました。その経緯をわりと詳しく、1回1回どういう事をやりましたというのを書いています。たくさんの方が来てくれて、にぎわって毎回ゲストも迎えてやりました。さっき御宿さんがおっしゃった村上さんもゲストに来て頂いて、この方は神戸のアーバンピクニックという東遊園地のところでやっていて、面白い視点をお持ちの方です。村上工務店という結構大きな工務店の若社長さんでして、ユニークな視点とユニークなしゃべり方をする人で、面白かったです。そんなことも含めて、私もいろいろ学びがありました。その時に思ったことが、私はファシリテーションを芦屋だけではなく色々な地域でやっていますが、今までいろいろな所でやった中で芦屋のファシリテーションが一番レベルが高い。市民のレベルがすごく高いです。レベルが高いとはどういう意味かということ、非常にセルフコントロールが効いている人たちで、自分たちが何を求められているかを理解していて、瞬時に察してそれに対して最大限的確なレスポンスをしていくというタイプの人たちなんです。よく他の地域でやると、誰かがずっと喋って他の人たちはシーンとしてしまったり、誰かが意見を言い出すと叩き潰しにかかったりというようなことが普通にあるんです。そうかと思えば全然無関心で「早く終わらないかな」というのが目に見える地域もあります。芦屋はそういうところが全然なくて、適度な体温で的確に関わり的確にキャッチボールをして、他の人の意見を尊重する。でも自分の言いたいこともちゃんと言う。宿題をきっちりやってくるような、すごく優等生な参加者が多かったです。私はある意味やりやすかったし、ある意味すごくハードルが高いというか、こちらがちゃんとしないと冷たく離れていくような感じがしたので、緊張感を持って最後

までできました。そういうことを考えると、この人たちはすごく市民参画協働に向いている人たちなのではと思いました。

何か足りなくてみんなその所に寄ってきてないけども、ちょっと寄せるとすごく力を発揮するし、意見のレベルはとても高い、私はいいなあと思ったんですね。そういう意味で言うとワークショップだけに限らず市民が関わってくるということに対して、うまくコントロールして導入していくと行政にとっても力になる、武器になるような市民なのかなと思います。

もう1つ思ったのは、「一方、芦屋市の職員さんはいかがなものでしょう」ということです。結局そういう関係になったら職員さんがしっかりしないと市民協働に負けてしまうわけです。市民側がすごく出来が良いので。職員さんたちについては、私は、よく分かっているけどちょっと経験不足だと感じました。それは仕方がない。御宿さんも言ったように今までの経過の中で慣れていないわけですね。皆さんの能力が低いのではなく経験が足りないわけですね。だから、もう少し経験を積んでいかないと、その強力な武器を使いこなせず、逆にやられてしまうと感じたので、きっちりと行政のレベルを上げることは別途必要だと思います。

そういう2つの要素や課題を考え合わせると「こっちはいい武器がある」「こっちはいい武器を使いこなせるだけの能力アップを図りたい」と考えるとやはりこれは回数を増やして、こういう機会を芦屋の中で作っていくと、オンザジョブトレーニングのような機会を増やしていくということが、一番手っ取り早いと思ったりしました。だけどさっき言った通り、芦屋市民はすごく勉強もしているしレベルも高いので「何を切り口にするのか」「着地点としてどういうふうに持って行くのか」「どういうふうなバラエティがでてくるのを想定するのか」ということをよく考えながら、切り口を多くワークショップをすると、いろいろな人が登場してくれて、さっき言っておられたような、なかなか接触できない、どこに誰がいるかわからないみたいなことが解消されていく感じがします。

例えば「まちラボ」のほうで約25人と、もう1つ同時に走らせたワークショップがあって、こちらでも約25人の参加者がいて、5、6人は重複して参加していましたが、足すと約50人くらいの顔が見えてくるわけです。ワークショップは2つとも12月で終了したのですが、50人のうち30人ほどが「ここでやめたくない」と言いだして、「やめたくないから任意団体を作りたい」という話になって、今30人くらいの任意団体ができています。彼らは何で「やめたくない」と言い出したのかと言うと、このままでは机上のプランで終わってしまうので、自分たちが出したプランを実践したい、これからどんどん現実のものにして実現したいけど、「机上のプランの勉強が終わったので、どうぞやってください」と言われても、それはまだできないというのが彼らの言い分です。例えばワークショップで固まった自分のやりたいことについて、実際にどういうふうに会場を見つけたりチラシを作ったりしていいかわからないし、もう少し助けてほしいというオファーなんですね。成果としてはとてもすばらしい事だと思います。そういうオファーをちゃんとしてきてくれて、もう少し先に進むために力を貸して下さいと言っているわけなので、私はあと1年間その30人とやってみようかなと今思っています。だからこういうふうに巣立ってくると、30人いたら30人の市民活動ができるわけです。彼らはそれを「市民活動だ！」と強く思っているわけではないです。でもそれはまさに市民活動で、市民参画協働です。そこを紐づけて行って、もう少し彼らが実際にやって「これは面白い」と思った時点で「この面白いことが実は市民参画

協働なんだよ」と言おうと思っています。そうすると「これが市民参画か」と気づき、今まで市民参画なんて面倒くさいと思っていたけど全然違うじゃないか、すごく楽しいことじゃないかと思ってくれるのではないかと思うのです。そうすれば30個の市民協働、市民活動が根付いてくることになると思います。話し合いばかりせず、やってみるということがすごく大事なのでは思っていて、そういう意味では、榊原委員が参加しているフライパンという団体の活動も楽しいですし、みんなもっと表面に見える活動をやって、そこから人を引き込んでいくというのは、答えになっているかは分からないですが、やり方の1つで、簡単かつ効果的なやり方なのかなと思っていますが、榊原委員いかがでしょうか。

(榊原委員)

今聞いていて、確かに芦屋の市民活動は素敵なものだなと思っていて、ただし、市民主体で出来ているものって、行政の公助がいきなり関わらないからこそ面白いというか、手を離れているからこそ、いまの市民にとってニーズにマッチした表現が出来ている。逆に言うと市役所からすると、なぜ出来たかを分析する対象とするのだけども、ほんとに市民が自身で活動したいと思うことは、公助（役所の難しいルール）を活動の設計に入れないことに意味があるのかなと思います。参画協働って言葉がありますが、公助が関わりつつ自助共助の部分を生み出すことを支援して、いつかその自助共助だけに戻るとかがいいですね。

もう1つ、芦屋の問題にはそんなに詳しくないのですが、田舎の場合だと自治体の活動の一部を自治にお返ししないといけないような宿題のタイミングが来ている。その時の参画と協働は、必要に迫られたいろいろな活動が出てくると思います。芦屋市にとって、その課題は何なのかを明確に、どの課題はどの地域にいつ発生するかということを、新しく議論する人たちには分かりやすく伝えないと、議論がいろんなところに行き過ぎて長くなりがちなのかなとは思いました。ただ、芦屋の市民活動ってカッコいいんですよ。それらをキャッチアップできて、公助が関わっているところでもうまく彼らにつなげていくサポートができるといいのかなと、今の話を聞いていて思いました。ただ、一帯をもう少し可視化して、どこの話しをしているのかを分かりやすくすることが議論の密度を濃くするためには必要だと思います。

(渡辺会長)

市の理想像があれば示してほしいです。

(榊原委員)

そうですね。どこまで出来るかとか。

(渡辺会長)

市民参画協働って言っているけど、「例えばこういう事が起こったらすごく僕らとしては嬉しい」ということがよく分からない。

(榊原委員)

市職員の協働という質問がある中で、でも市職員の中には市民としての立場も存在しているので、公助として答えていいのかという、もどかしい質問もあって、若干このアンケートは分かりにくいと思うんだけど、それがどの部分か可視化できるといいかなという気がしましたね。

（事務局：御宿）

そこは、一口では言えない複雑な思いがあるところです。すごく行政の市民参画協働の理想像ですが、渡辺さんがおっしゃったみたいに多方面から市民には力があると言われます。では、それを活用しない手はないという視点で、行政に代わって、固くなり過ぎずフレキシブルにいろいろな地域の課題を解決してもらおうとか、あとは芦屋市は狭いし、組織としてもそこまで大きくないので、職員も頑張っていますが、抜本的な外からの意見で頭を打つようなアイデアを内部から出していくとなるとなかなかしんどい部分もあります。そういったアイデアを市民から出してほしいし、それを行政の施策に反映してほしいという思いはありますから、クリエイティブに活動されている方との接点を市としては持ちたいです。いい距離感を保ちながらたまには協働、主は自走してもらうのが理想です。都合よく言えば、困っている分野があれば市民のその力を貸してほしいという、身勝手かもしれませんが市としての意見はそういうところです。

あとは本当に長いスパンで、どの時点でそうなるのかなというのは想像出来ませんが、先ほども言いました人口減少がどんどん進展していくと、本当に行政が出来る範囲というのはどうなっていくのかという思いもあります。来たるべき危機といいますか、そういう事に対してみんなが、身の回りの世話は自分たちでやっていくということを考えてもらうことも一方では進めていきたいと思っています。芦屋はかつて、阪神・淡路大震災前はすごく裕福な財政状況でして、市民から得た財源は市民へ還元しますので、すごく豊かな財源ですから、市民に手厚い施策をたくさんやってきたわけですが、阪神・淡路大震災で危機的な財政状況になり多額の負債を負ったことで、行革を機にサービスを縮小すると「これまでこんなサービスをしてくれたのに、サービスが悪くなっているじゃないか」というお声をいただきました。それがこの先の人口減少がより進んだ時に、かつてのような豊かな財源の時代に戻ることはないでしょう。本当に地域の人も減る中で、だからと言って行政も財政的な投資が難しくなる中で、ではどのようにまちづくりをしていくかという時に、まさに参画協働と言うソフトの仕掛けの中で、例えばゴミが落ちたとします。「高齢者がいっぱい地域では拾えません」というお声があった際に、市の財源で業務委託をし、そこを収集してもらいますというようにお困りごとがあったらすぐに直接的な財源投資をしますというやり方では、財政的な負担が大きくなりいずれ耐えられなくなってくる可能性があります。それであれば、例えば、そのゴミを拾う事を1つのチャンスと捉えて、さっき言いました課題をプラスに捉える。みんなが楽しくゴミを拾えるというところに我々としては財源を投資して、そこで出来上がったコミュニティに、そこを管理してもらえませんかという方向などを考えています。一度業務委託をしてお金を支出してしまうと、そこからはずっと支出が固定的に出るわけで、そういったことが積み重なるとそういった支出で財源が硬化化してしまい、新しい施策をしようとしてもそこへ財源を投資できなくなります。新たな仕掛けを参画協働の中で模索していけたらと思っています。しかし、そのアイデアが我々には乏しいところがありますので、できるだけ皆さんのお力を使っていきたいと思っていますし、そういう活動に対するブランディング

グですかね、例えばお洒落、かっこいい、可愛いとかであるとか、洗練されていたり感度の高い集団に属したいというような感覚が、大なり小なり人ってあると思うんですけども、そういう方向に目を向かせるような活動を、行政も展開できたらと思っています。でも行政目線で主導してしまうと、どうしても固くなりがちというのがありますので、そこは芦屋市民のセンスなんかも活かしてやっていける部分もないのかというところですよ。

(加藤委員)

綺麗な事例過ぎるかもしれないですが、渋谷のハロウィンのゴミの清掃ってすごく変わったと思います。芸能人が率先して声をかけたというのがありますが、あれはゴミの片づけまでを1つの祭りにしたというのが大きいと思っています。ただ「綺麗にしよう」「掃除をしよう」となるとたぶんネガティブな意味であまり動かないかと。やはり掃除自体をイベントにしたということで、先ほどの話しのように「ゴミの管理をして下さい」だと、あまりポジティブではない。それを見え方や伝え方、やり方を違う見え方にすることが、ゴミや清掃に限らずですけど、重要なのかなと。それが芦屋市民のセンスだと思います。

(渡辺会長)

私は加藤委員が言ったことに関しては規制緩和を要請しないといけないと思います。例えば、ゴミを拾う話を楽しくしようとしたら、それをお祭りのように後で飲み食いできるようにしたらいいじゃないですか。別に食材を買わずとも持ち寄りパーティや焚火のようなことが出来たらいいわけですよ。だけど、「焚火はやったらだめ」と言われると、こちらとしては楽しい事の考えようがなくなってしまいます。

だからそういうところは規制緩和のような、お金を投入しなくても出来る事なので、そういうような意味では行政も楽しい事をやるためのタガを外してくれないと、私たちがいくら考えても「あれもあかん、これもあかん」と言われてしまうと、考えられなくなる。

(事務局：浅野)

地域を巻き込んでくれればこちらもやりやすいというのはあります。結局、その近隣の人とかが苦情を行政に言ってくるという事が起こりうるので、そうなると行政側も「それはそうですね」と聞いてしまう。そこでそういうテーマ型で動かれる方が地域で「一緒にやりましょう」と、自分たちだけが楽しいのではなく、みんなが楽しいとなれば、行政側も「大目に見ようか」となる部分は多少なりともあります。結局、こっちの市民はやりたいけど、こっちの市民はやってほしくない。というそこが大きいと思います。

(加藤委員)

ポイントは2種類あると思っています、望む人とそれを嫌がる人が分かれるのは、ただ楽しいことがメインになっているところだと思います。パーティをしたりとか。先程の渋谷の例だと、ゴミを減らす、ゴミに困っている人の課題を楽しく解決するので、それを辞めてくれと言う人はまずいないと思います。困っている人たちを助けるのが一番の目的ではと思っています。

(渡辺会長)

社会課題を解決するのが本当は目的だけど、「社会課題を解決しましょう」と言ったらみんなが面倒くさいとなるわけです。例えば、社会課題解決を餡子だとしたら、周りを美味しい皮で包むような。でも、その美味しい皮を作る時に「小麦粉も卵も使ったらあかん」というような規制がたくさん入ってしまうと「そこまで言われてなんで皮を作らなあかんの」とか「そしたら何で皮をつくったらいいの。」ということになってしまいます。「小麦粉と卵くらいは使ってもいいように行政さん何とかして下さい」というような話です。

(加藤委員)

目的に対して、全員が合意をするような課題解決が前提になるかと思います。

(渡辺会長)

それを悪いとは誰も言わないと思う。そのやり方を考えるというのは、市民参画のうまくいく1つのポイントだと思います。

(加藤委員)

テーマ型になってしまうと、それを良しとする人とそうでない人がいる。

(渡辺会長)

音楽が好きな人と、それをうるさいと思う人みたいなところですよ。

(榊原委員)

ゴミの話が出ましたので、昔、他のところでやったアイデアを思い出しました。協働って市役所と市民があり、市役所の中の協働もあるし公助の部分でリストアップしている部分もありますし、きれいに縦に割れていますよね。例えばゴミ系の自治組織で言うと、ゴミを捨てない人はいないと思うんですが、例えば独居の方で自分の事が心配だけど、わざわざそのゴミのコミュニティの人たちにどうこう言うのは恥ずかしいけど、ちょっと見守ってほしいなという時に、例えばピンク色の線の入ったゴミ袋を使ってもらおうとか、それが出ていなかったらちょっと気づいてほしいという。ちょっとした仕掛けです。それはゴミのコミュニティの人たちしかわからないサインになります。ゴミ収集の人たちが最近ピンクのゴミ袋が出てないけど、入院してるのかなとか、ちょっとした思いやりのサインみたいなものが入っていくのって、市役所からしたら複合化の協力体制になるんですね。基本的にゴミステーションの話して、ゴミステーションを使っている人たちの世界なので、その部分は地域の自治組織なのでそこに対して公助で関わるところがあると思っていて、その会話とか対話とか仕掛けとかワークショップを生み出すのが役所の仕事ではないかと思いました。

(事務局：御宿)

そのあたりのアイデアが我々には乏しいと感じています。渡辺会長にいただいたワークショップでは施設改修という事をきっかけとしたワークショップをやりました。必ずしもそこで出た意見が直接施設改修に反映されるわけではなく、今後、施設を利用してもらえるであろう、今まで利用しなかった層をターゲットにして、話し合いをした中で、市が横からそれを見ながら「施設としてこんな機能があったらいいよね」「あんな機能があったらいいよね」と言うことを、設計に取り入れていくというようなやり方でした。今回は分かりやすい場があったので、ワークショップはいろいろな人に声掛けがしやすかったというのがありますが、芦屋の場合は、分かりやすい場というのは割と少ないと思います。どこに協働の余地を見い出すのか、参画もそうですが、どの分野から攻めるべきなのかというのは、行政サイドの意見やアイデアは乏しいと感じています。今のゴミの話しとかもそういう切り口で関わっていける可能性があるのだなど、お話を聞く中で気づかせていただいたので、そういうような参画協働の場として拾っていける仕組みがいるのかもしれないなと思いました。まだ明確な仕組みはお伝えできないのですが、関わるきっかけを見い出さなくてはいけないと思ったのが1点と、あともう1つ福祉的な話が出たので、本日は急遽ご予約がなくて出席できなかった日本福祉大学の平野先生が、一年前の会議で行政の課題についておっしゃっていたことの1つとして、まちづくりへの関わり方が総務省的なまちづくりの関わり方があると。これは分かりやすく言うと、衰退しつつある郡部を地域活性化しましょうというのが総務省系。厚労省系の話しというのは、山岸さんや松井先生が主としてやっている、高齢社会に伴って支え合いを目指すまちづくりです。これが案外交わっていないところに問題があるんだよというのを、ご示唆いただきました。

福祉部に地域福祉課という課がありまして、そういうお互い支え合いの環境を作りましょうという取組を進めているのですが、そういった取組に対して市民参画課側からどこに接点があるのか、同じ内部でありながら見えないんですよ。どうしたらその壁を越えられるのかとか、福祉の世界ではあまり出入りをしない人たちが実は山ほどいるはずなのに、その人たちの力をどのようにそちらへ傾けることが出来るのかということも含めて、接点というか共通の課題がどこにあるのかなと。先ほど加藤委員が言われたようにみんなが合意できる課題ってどこなんだろうと感じています。そのへんはどう思われますか。

(山岸委員)

ここで出ているのは本当に自治の分野のまちづくり。我々社会福協議会が進めるのは、地域福祉と言うことで、地域福祉の中には制度的福祉があって介護保険があると。それでも賄えない所が、地域の人が自発的な福祉という形で、例えば、道に倒れている人がいたら、手を差し伸べる。「大丈夫ですか」と声をかけるのが自発的福祉。じゃあ「救急車を呼ぼう」となったらこれは制度福祉になる。その地域福祉を進める中で、どこでまちづくりと接点を持つかと言うところが、今の地域共生社会になっていくのですが、まちづくりで言うと、我々、自治会さんと話をすると、防災とかが出てくるんですね。防災って直接福祉とは関係ないですが、防災の取組を福祉から進めることで、その地域の人が何かあった時に、こういう一人暮らしの人がいるじゃないかと言うような気づきがあった時に福祉が生まれるということですので、そういった両側面からのアプローチというのは必要なのかなと思います。

だから、本当に地域の中でいろんな活動がしたいという方がいて、会長がおっしゃっていた、30人來られて人間関係ができたというのが、もっと1人1人がやりたいと思っているけども、そのきっかけがないというところで、行政が地域に出て行ってその人を1人でも多く見つけていくと、行政の人が来てくれたということで住民の方、市民の方は喜ばれるので、そのへんの顔も見える関係作りからの協働という視点があってもいいのかなと、話を聞いていて思います。

(川原企画部長)

私は福祉の仕事をしていたんですが、障がい福祉と高齢福祉と10年くらいやっていたんですね。ちょうどその時に地域で課題を考えるという取組を始めた。中学校区に包括支援センターを置いて、包括支援センターで話を聞くんですが、そうすると高齢者の話しと言っているにも関わらず、当然ですが、障がいのある人、子どもの話し、防災の話し、それから防犯の話し全部入ってくるんですよ。で、芦屋では組織横断的な取組をしようとして、そこで上がってきた課題については行政の中では共通認識を持てるように、地域課題にあげれるようにという会議体の組織が作られているものがあります。担当者としては、もどかしい思いがあって、元気な人たちがこんなにいるのに私たちはいつもこんなに暗い気持ちで、当事者ばかりが集まってどうしたらいいのかと悩んでいる。一方で、この会議ではじめて、デザインという考え方を始めて知りました。本当に勉強になりました。そういう課題解決の方法があるのかと、そういうことを福祉の中でどれだけそれが活かしているのか、まだまだ未知数だと思います。新しい切り口で、ゴミの事は誰がやるんだと常々言っていたことが、もっと明るい切り口で考えられるものがあるだろうし、それだけの今の組織も社会福祉協議会が事務局として作って持っているので、入り込めると思うんです。次の計画の中では是非見えるかたちで、つながりというのを持っていけば実効性もあるし、市民の方も喜ばれる。参画して良かったとなるのではと、私は今回とても楽しみで、楽しく計画を作りたいと思っています。

(山岸委員)

渡辺会長が、市としてどういうビジョンを持っているのかとおっしゃいましたけど、今福祉の方では、住民抜きに住民の事を決めるなどと言うような当事者の声を反映させないといけないということなので、逆に何かするときは住民が主役であって、じゃあ住民がこの街に住みたいと、どんな街に住みたいのか、テーマとは別にビジョン型というか、そう言ったテーマでワークショップとかで顔の見える関係を作っていくと、テーマ型を過ぎたというと次はビジョン型なのかなと。

(渡辺会長)

今、山岸さんが言ったことは業界ではバックキャストिंगと言われている。いわゆる理想像を置くと、そこから逆算していったらどういふうなことを私たちがやったらいいのか、働きかけをしたらいいのかというような積算方法ではなくて逆算方法で物事を決めていくとか、設定していくというようなやり方が非常に有効ではないかと、少し前から言われています。なぜ私が「芦屋市の理想像はどういうものですか。」と聞いたかということ、そのバックキャストिंगをするために、市の理想像を教えてくださいと、それを私たちが消滅して、ある程度こうしたらいいよねと

このところは山岸さん、松井先生どうですかとなるのですが、ここに漠然と「どうしたらいいと思いますか」と投げられても「いやいや、やり方は無数にあるし」という話になるじゃないですか。だから、やはりバックキャストをするなら市が叩いて、自分たちで、少々贅沢な悩みでもいいから理想像でもいいので出して「こうなりたい」というようなことを言ってもらったら、もっと具体的に話がしていけるのではと思います。

（松井委員）

私のやっていることも紹介させていただいてもいいですか。某市で、健康とまちづくり講座の担当をされていて、市民で60歳以上が対象でやっているんですけど、タイトルは健康とまちづくりなんです。あえて福祉を入っていないのですが、福祉を入れると参加人数がすごく増えることがあるので。私を中心になって企画をさせていただきました。対象は60歳以上ではありますが、入ってこられた方たちは健康の話をするのかなと思って入って来られているわけですね。でも、当然最初は健康の定義みたいな話をしながら、健康と言うのは病気のことだけではないですと。私自身がヘルスプロモーションという概念をとっても大事にしているので、主人公は参加者であって行政や私たちがやっているのはお手伝いですよと言いながら、あと私自身が思っているのはスマートウェルネスシティという概念。芦屋市は入っておられないと思いますが地方の小さな自治体は、市はこんなふうにやりますよ、こんなスタイルを目指しますよと示しています。例えば新潟県見附市の事例としては「歩きましょう条例」を作って歩きやすいようにして街の整理をして、市民に公園の企画運営をお願いをする。その結果行きたいところに行けるようになった。地域で健康活動をするので医療費が結果として抑制されているとか、いろいろな成果が出ていますし、福井とかもいろいろなことをやっていますし、あるいは岐阜市とかも歩けるように、出来るだけマイカーを使わないようにいろいろな施策をとっています。私は念頭におきながら、某市の仕事を引き受けて、市の社会福祉協議会として一緒にやっている。社会福祉協議会だからまちづくりという言葉が入っています。でも来た人の中には、自治会に疲れ果てて来ている方もいる。いろいろ愚痴が出てくるわけです。でも少しずつ慣れてきたら、この前も民生委員さんに来てもらって「民生委員ってなんですか」って話をするわけです。市内にどれだけ欠員があるのかという話もしながら、民生委員さんがいるからこそ、民生委員さんは何も高齢者や福祉のことだけではなく、子どものこともやっているわけです。そのことも話しをしていると、だんだんこちらに気持ちも向いてきて、自分の地域に民生委員さんがいるのかという関心を引き付けました。引き付けると、「あなたがお住まいの地域の民生委員の名前くらい知っておきましょうよ」と、そういう話をしながら、今度は、まちづくり協議会さんに来てもらって、まちづくり協議会さんの話をする。まちづくり協議会と自治会を私はなんとかこれをセットにできないかなと思っていて、当然のことながら子育てもなんですけど、そんな話をする中で結局健康は病気のことだけではなく、地域の健康水準が高いと、市民の意識が高いと元気なんです。そういう相乗効果でとにかく仕掛けづくりに模索中です。

私は仕掛けを作るのであれば、やはり市民に参加してもらおう。そんなにすごく思っていない市民でもキーパーソンを1人置いておいて、雇うというか人件費は時間給になるわけですけど、市民を集めてきてそういう方を育成して2年間くらいかけて、そして地域に帰っていただくという

仕組みを作っていくといいかなと思います。

芦屋市で言うと、私の夫が今年芦屋シニアカレッジに入って本人はすごく喜んでいますが、私から言わせると芦屋市はすごく手厚い。至れり尽くせりだなという感じが正直して、夫はすごく喜んでいて、公民館の方のお世話もすごくいいです。どちらがいいのか分かりませんが、自分で考えてもらうそんなふうな仕組みをいろいろな所でお作りになられたらだんだんそういう市民が増えて地域に帰ってくる。自分が高齢者で、健康なので健康の取組をやっていきますけど、高齢者版もあったりだとか、富山で「この指止まれ」という施設があって、もともと高齢者向けの施設なんですけど、子どもから障がいのある方までいろいろやってくる、そういう拠点的な所を芦屋市も少し作ったら、そこで福祉だけに限らず地域の課題とかあるいはそういうところからテーマ型に広がっていく拠点みたいな所がもう少しあったらいいのではと思います。他課との連携と言うことが垣根を低くしてということだと思います。先ほど行政が阪神・淡路大震災の前は豊かだったと言いますが、やはり今も豊かなのかなと思います。

(渡辺会長)

私は芦屋は協働してくれる市民の一本釣りをした方がいいと思います。投網をかけてもうまくいかない市ですし、逆に言うと一本釣りできる規模だから。神戸だったら一本釣りできないと思う。一本釣りした人がまた一本釣りしたら、どんどん広がります。そうして少しずつ行政とか地域活動にシンパシーがある人を集める方向が、結局集めやすいし、手っ取り早いと感じます。その一本釣りをする機会を市が考えるといい、例えばこの前のワークショップみたいでもいいですし、それが一番いいのではと思います。

ちゃんとコンセプトが伝わった人たちが拡散をしていけることが、芦屋市の行政規模のメリットだと思います。

(事務局：御宿)

そうだと思います。ある程度、距離感が近いと思います。それこそ大都市だったら規模が大きすぎて本庁にいたら、各区の1人1人の事までは把握できないと思いますが、芦屋市規模だったら、人づてに辿っていけば、人の輪が広がっていく可能性も十分にあると、日々の自治会の人のやり取り1つをとってもですけど、そういうのは感じる部分はあります。例えば福祉との接点もそうですし、それに限らない、いろいろな課題に対するアプローチの仕方という、皆が合意できるテーマを持ってそれを1つのテーマではないですがそれを掲げながら、場を作っていくというのが、次の我々がやっていくことなのかなと思いましたし、それをいろいろコラボレーションしながら進めていくことなのかなと思いました。

時間もそろそろせまっておりますので、今後のスケジュールだけお伝えさせていただけたらと思います。アンケートが終わりましたら、そのタイミングで次回お集まりいただきたいと考えています。年度は越えますが、引き続き今日いただいたご意見プラス、次の計画の骨子に関するご意見をいただけたらと思っていますので、次回開催する時期は皆さまに別途調整させていただきます。予定としては5月から6月でできたらと思っていますところでは。

(渡辺会長)

ではこれにて閉会させていただきます。ありがとうございました。次回もよろしくお願ひします。